千刈狸の呟き

～ 全国高等学校総合文化祭に思うこと ～

散　文　狸

2026年夏、秋田で第50回全国高等学校総合文化祭が開かれると聞いた。文化部のインターハイとも呼ばれるこの大きな祭で、由利本荘市は日本音楽と囲碁将棋の会場になるという。田舎の狸には縁遠い催しではあるが、全国の高校生が感性を磨き合う場と聞けば、多少なりとも興味がわいてくる。その中で、文芸部門「散文」班のテーマが「予言」なのだとか。高校生たちはこのテーマからどんな物語を紡ぐのだろうか。明るいまっすぐな青春を描くのか、はたまた暗く不安の立ち込める崩壊の始まりを描くのか。試しに散文狸も「予言」について考えてみることにした。

狸の皆さんは、もうお気づきであろう。長く狸をやっていると、少し先のことが見えるようになる。若狸に、ささやかな未来を示すことができるのだ。「その人、具合が悪くなるから、朝一番に主治医に一報入れてね（その後、菌血症で急激に血圧が下がる）。」「アミラーゼを見ておいて（結果、膵炎）。」「マイコプラズマPCRで、マクロライド感受性も確認しとこう（結果、マクロライド耐性）。」「頭蓋内も検索したほうがいいな（結果、脳出血）。」「あとは良くなるよ（ほどなく良くなる）。」同じ事象を前にして、老狸には当たり前に見えるものが、若狸には見えていないことが多々ある。もちろん、それは予言ではなく、経験に裏打ちされた予測であると言ってしまえばその通りであるが、すぱっと当たると、確かに自分が予言した、と思える。ただ、気持ちよく予言が当たった時ほど、経験だけを振りかざす老害狸にはなるまい、より確かな未来を見通せるようにさらに知識と経験を蓄え続けねばと、己を戒める狸である。

不本意な未来が見えてしまうこともある。状況によっては、その人が五年後に生きている可能性が低いことや、この先につらい治療が待っていることがわかってしまうのだ。病状説明を受ける本人や家族にとって、それはなんとも不吉な予言であろう。意図せず先を見通す力を手にしてしまったと気づく時、狸自身もまた、何とも言えない複雑で苦い思いにとらわれる。予言が当たることに備えて、患者さんや家族が心の準備をできるよう説明し、一方で予言を外すために自分の知識を更新し、治療を尽くす。それが、この力の使い方なのだと考えている。

専門分野を離れた予言となると、散文狸にはなかなか荷が重い。しかし人は知識と経験と想像力で、それぞれの未来を予想することができる。もしその未来が不本意なものであるなら、知恵と努力と協力で、少しでもよい方向へ向かわせることもできる。子どもが減り、働き手が減り、やがて高齢者さえ減っていく当地域に、人々はどのような未来を見るだろうか。地域の病院や診療所、介護施設が縮小することは避けられず、病院そのものがなくなることや、特定の診療科が消えることもあり得ると感じている。この未来は散文狸の思い過ごしなのか、それとも予言と呼ぶべきものなのか。もし外れてほしい予言なのだとすれば、持続可能な医療体制を構築していかなければならない。高校生が明るい物語を紡げるように、この地域の未来も安心できるものであってほしいと願っている。